

# 「お産」好きやわー

加藤正枝

川畑産婦人科助産婦(大阪市住吉区)

大先輩の助産婦の方々からすれば、私なんてまだまだヒヨコ助産婦。しかしその私も、今年で30歳。15歳で看護の道に入り、早15年です。

幼稚園の頃から看護婦になりたいくて、小・中学校の頃は、何が何でも保健係をやっていたことを思い出します。近所の方が助産婦さんだと知ると、ライバル心を持って「将来は、私が“正枝ばあさんの無料出産所”を開く」と言っていました。今でいう助産院のことですね。“無料”というところが何とも私らしいのですが……。そんな小さな頃から助産婦にあこがれていたことに、我ながら感心します。

そんな私も、20歳の時、卵巣嚢腫で片方の卵巣を切除してから、自分の妊娠、出産、育児を真剣に考えるようになり、最終的にこの道を選んだ理由となりました。働き始めて、とにかく早く子どもをつくりたかったのですぐ結婚し、めでたく今は3児の母。ありがたいことです。

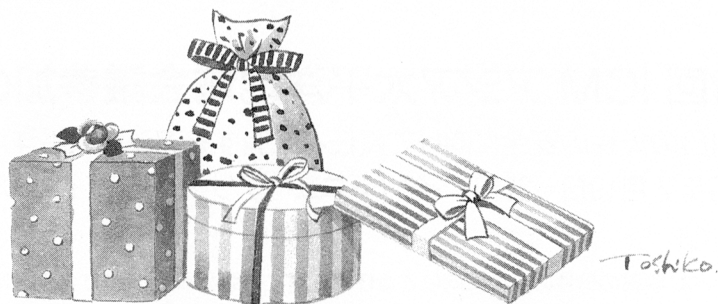
## 自分でどんな出産がしたいのか

私が最初に勤めた所は、1000床もある病院の産科で、妊娠中の管理をする外来も、分娩も、産褥も、新生児も、すべて別々のスタッフが担当し、妊娠から産後を継続してみることはなく、ただひたすら1か月150例の分娩だけを管理していました。そんな状態で結婚し、妊娠しても、自分はどこで出産すればよいのかもわからず、「夫立ち合いのできる所」ただそれだけの条件で、結局、自分が働いていたような総合病院の産科で出産しました。

恥ずかしいことですが、産む場所探しの条件に、「自然出産ができる所」が出てこなかったのです。学生の頃、助産院の見学実習に2日間だけ行きました。ママもベビーもおらず、来月には閉院する予定の所で、私の助産院に対するイメージはあまり良くはなく、その後も、そして自ら出産をする時にも、「助産院」という名称は私の頭にはなかったのです。

それが、第1子を病院で出産してからは考えが180度変わりました。第1子は、分娩第1期はできるだけ家にいたかったこともあり、病院到着後30分で子宮口全開大。ここまでは予定通りで良かったのですが、努責後の児心音ダウン2回のみで、吸引。もちろん会陰切開。何も言う暇がなかった……。妙に私の頭は冷静だったことをよく覚えています。悲しかった。自分たち(私と夫)で出産をしていたのに、それを妨害された気分でした。もちろん、かなり深い会陰切開のお陰で産後は1か月以上つらい思いをしました。「次は絶対に自然に産みたい」と、その時初めて思いました。今思えば、私は助産婦として誘発や促進の中で育ち、自然出産の中で育っていなかったのです。

出産する所を自分で決めるためには、自分がどんな出産をしたいのかがわかっていなければなりません。第2子の時は必死で探し、雑誌の中で大阪の正木助産院を知り、すぐに駆けつけました。両親学級で「産ませてもらうのではなく、自分で産む」「妊娠中、自分の管理ができない人はここでは産まれへん」「自然にさからったらあかん」、これらの言葉を聞き、すぐに正木先生の所で出産



することを決めました。第2子、第3子とも大安産でした。もちろん夫も、そして小さな子どもと一緒に、家族ぐるみで出産し、「自分たちで産んだ」という大満足な気分になることができました。

楽しく満足な出産をするとまた出産したくなります。実は3人も産んでおきながら、まだ妊娠したいのです。お産ってこんなに楽しいものなのに、「もう2度といや」という言葉をよく聞きます。もったいないことです。一生にほんの数回しかない大イベントを苦い思い出にするのではなく、すばらしい思い出に、そして楽しまなければ損だと私は思います。できれば御主人と一緒に！2人の子どものものですから。

### 若い女性に早期教育を

お産ってこんなに素敵なんだということを、私はもっと伝えたい。これから産み育てる女性に。そもそも出産というものをよく知らずに出産するものだから、自分で産む所も選べず、パニックにもなるし、あげくの果てには、器械に囲まれ、薬を使い、会陰を切り、自然から遠く離れた形で出産に至っても、それが普通だと錯覚する。悲しいことです。それが現実なのです。だからこそ手遅れにならないよう、若い女性たち、もしくは、それ以前の思春期の子どもたちに、自分の体、性を教えていかなければならない時代に今あるのだと思います。

### 正木先生との出会いで地域助産婦に

私は今まで、分娩介助だけしか行なえない助産

婦でしたが、正木助産院で自然出産をしてからは、助産婦の仕事ってとても幅広く、そしてどれだけ地域から必要とされているのかを知りました。「病院勤務助産婦はたくさんいるけれど、地域で働く助産婦は少ない」とお尻をたたき、私の目を覚まして下さった正木先生には心から感謝しています。

車の免許を持っていなかった私に、「助産婦は、いつ呼ばれるかわからへん存在なんや。車の免許ぐらい持っときなさい」とアドバイスを下されたのも、当時67歳の正木先生です。本当は子どもが小さいうちは家にいたかったのですが、先生が「私が生きている間に、あんたら育ててくれなあかん」などとおっしゃるものですから、私も慌てて重い腰をあげました。しかし、結局それがよかったのであり、今の私がいるのです。

私は毎日、3人の子どもの保育園と学童保育に預け、保健所の両親学級や新生児訪問をはじめ、ほんの少しですが地域にもかかわっています。そして川畑産婦人科では、お産が大好きで、そして「自然」を大事にして下さる先生とともに、満足のいく出産のお手伝いをさせていただいております。自分の経験(苦しいことも、うれしいことも)を忘れることなく、心ある助産婦になりたいものです。あーやっぱり、「お産」って好きやわー。

さて、今回は、私の助産婦学校の同級生、椎葉美香さんを紹介します。現在2人目を妊娠中ですが、バリバリ働いています。